

車しか走っていない国道の縁を、家の形をしたものが歩いている。家の下からは二本の足が突き出し前進している。なかにいるのは、一九八八年生まれの美術家・村上慧だ。彼はリュックをしようつた上に発泡スチロールで自作したこの家を被り、全国を北へ南へ移動する。夜には家を置かせてくれる場所を探してドアから足だけ出して眠り、起きるとその町で見た人々を絵に描く。そうやって移動しながらつけた369日間書きつづけた日記である。

なぜ彼はこのようない奇妙な行動を自分に課さなければならなかつたのか。行き過ぎた消費社会に労働を切り売りする虚しさ。あれだけ大きな原発事故があつたのに、平然と元にもどつていく日常の怖さ。その原發に反対を唱えて、差した指がすぐに自分にもどつて身動きがとれなくなる。この萎縮を解くには自ら動くしかない。

単なる旅ならリュックにテントを入れて移動すればいいが、彼が目指すのは「移住を生活する」ことだつ

た。「定住と貯蓄」の象徴としての「家」を問題にするのだから、家を捨ててはダメなのだ。別の姿を与えて抱え込まなくてはならない。

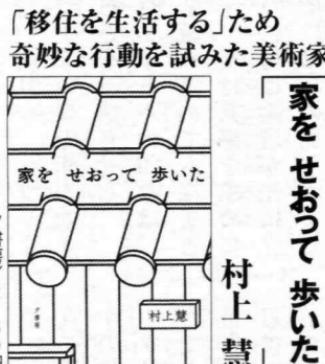
かくして「生きていく限り、連れて歩かざるをえない荷物」としてそれをせおつて歩くというカタツムリのような発想が生まれる。

何かの答えを得るためではなく、むしろ「問い合わせ立たせつづける」たて歩かざるをえない荷物」としてそれをせおつて歩くというカタツムリのような発想が生まれる。

何かの答えを得るためではなく、むしろ「問い合わせ立たせつづける」ため歩かざるをえない荷物」としてそれをせおつて歩くというカタツムリのような発想が生まれる。

## 家をせおつて歩いた

村上 慧



夕書房 / 2160円

行く先々ですばらしい出会いがある。本気で物を考えている人たちが列島の各地にいるのだ。その交流の光景も感動を呼ぶ。

家をせおつてふいに現れる彼は、土地の人にとっては「美術家」ではなく、突飛な変人、にすぎず、名付けから遠いゆえに、人々の日常を揺さぶり、彼もまた揺さぶられるのだ。

○評者

作家

大竹昭子